

ポピュリズム外伝——『オズの魔法使い』考

室谷 哲*

はじめに

本稿の目的は二つある。一つは『オズの魔法使い』を通してアメリカにおけるポピュリズム観の変遷を考えてみること。第二は『オズの魔法使い』というお伽話が現代アメリカ社会においてもつ意味を歴史的文脈の中で考察してみることである。この二つの試みは『オズの魔法使い』をどう理解するかという問題から発生したもので互いに密接に関連している。『オズの魔法使い』をポピュリズムとの関連で考察し始めた発端は、1964年の『アメリカン・クォーターリー』誌上に発表されたH・M・リトルフィールド「オズの魔法使い——ポピュリズムの寓話」論文に触れたことだった²⁾。ポピュリズム自体の史的研

究ではなかったし、筆者が高校教師だったこともあろうか、ポピュリズムの歴史学的研究ではまったく触れられることのない論文だったが、『オズの魔法使い』が19世紀末から20世紀への世紀転換期アメリカにおけるポピュリズム観の一端を示す素材として扱われており、思想的興味を引き起こす魅力は備えたものだった。論文名の通り、フランク・ボームの著わした子ども向けお伽噺『オズの魔法使い』が、19世紀末アメリカ中西部を中心に結成された人民党による第三政党的政治運動ポピュリズムの寓話¹⁾として、登場人物その他諸々の物語上の設定が当時の政治状況のあれこれと照合させられていたのである。あらかじめ要点をかいついでみると、たとえば主人公の少女ドロシーがオズの国で出会い旅の道連れになる「かかし」はポピュリズムの基幹部分を構成した農民を象徴し、「ブリキの木こり」はその農民運動と連携することになる都市の産業労働者を意味するなどと考察されており、切れ味には鋭さが感じられた。とくに、愛する女性と結婚するため必死で働き、足も腕も頭もついには心までも失って完全なブリキ人間になってしまった木こりが労働者を意味するという分析には、疎外論的深みもあり、

*室谷 哲(Satoru MUROTANI): 静岡県立大学国際関係学部教授。東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。「中産層的アメリカ文明における大衆消費社会の誕生」関口尚志ほか編著『英国近代と中産層文化』日本経済評論社、1999年。「100年後のソースタイン・ヴェブレン——『有閑階級』と『経済人』」『アメリカ史研究』第22号、1999年。「家庭管理思想と現代アメリカ人の形成——ホーム・エコノミクス運動の歴史的帰結」静岡県立大学英米文化研究室『ことばと文化』第2号、2001年など。

murotani@u-shizuoka-ken.ac.jp

¹⁾ L. Frank Baum, *The Wonderful Wizard of Oz*, 1900.現在は様々な版元から出版されているが、その他のオズシリーズ2作品をも収録したペンギンブック版 *The Wonderful World of Oz*, Penguin Books, 1998.には、編者によるイントロダクションと注記および参考文献リストが載っており、便利である。なお、邦訳はライマン・フランク・ボーム、佐藤高子訳『オズの魔法使い』ハヤカワ文庫、1974年を用いた。

²⁾ Henry M. Littlefield, “The Wizard of Oz: Parable of Populism,” *American Quarterly*, 16, Spring 1964.

なお Peter Dreier, “The way it wOz and iz,” *In These Times*, Sep. 27-Oct. 3, 1989 は *Pacific News Service* で配信された記事を週刊新聞に再録したものが、リトルフィールド論文のエッセンスの要約とみてよい。

なかなか見事なものであった³⁾。ところが反面、これまたドロシーらの仲間となる「臆病なライオン」は 1896 年大統領選挙で共和党候補マッキンレーに破れた人民党相乗りの民主党候補ウィリアム・ジェニングス・ブライアンを象徴するとか、あるいはドロシーらがエメラルドの都まで辿ることになる「黄色いレンガの道」は黄色＝金の色との理由から東部資本家の金本位的利害を、銀貨自由鑄造の要求を意味する「銀の靴」を履いたドロシーに率いられ偉大な魔法使いオズのいるエメラルドの都まで旅する一行は、連邦政府に救済を求め首都ワシントンへと行進したコクシー軍を、一方偉大さは感じさせるものの人々の要求を叶える力は何ら持たない「オズの魔法使い」は南北戦争以後の大統領の誰かを象徴する、などと次々になされていく歴史的事実と物語の設定との照合作業の数々は、一見よく練られたもののようでありながら、後述するように「オズ」は誰かという一点を中心に納得しきれない疑念を残した。リトルフィールド論文以降も同種のポピュリズム寓話論が 20 本あまり発表されていたが、結局いずれも当初抱いていた疑念を晴らしてはくれなかった⁴⁾。この物語にさまざまな色彩が用いられていることに着目した者は色の象徴性を、金と銀の象徴性に着目した金融史家はポピュリズムの金融論をこの物語で説明しようと企てるなど⁵⁾、みな独自の観点

からの解釈を加味していたが、根幹部分の象徴性理解に関してはどれもリトルフィールド論文の推理をほぼそのまま踏襲していたからである。ところがリトルフィールド論文はその着眼点と推理の面白さが受けたのであろう、同種論文の存在もおそらくは助けとなっており、後にアメリカ論論文集に再録された『オズの魔法使い』を「ポピュリズムの寓話」とする考え方はそれなりの市民権を得ているといえそうだ。しかし、である。『オズの魔法使い』は「ポピュリズムの寓話」だとする議論が幾多の論者によってどれほど積み上げられようとも、そのいずれもがリトルフィールドの推理を踏襲することから出発する限り、『オズの魔法使い』＝「ポピュリズムの寓話」論は砂上の楼閣となる危うさを孕んでいる。その意味で、何よりも問われねばならないのはリトルフィールド論文の妥当性いかんである。だがそれにしても、『オズの魔法使い』を「ポピュリズム」と結びつける「ポピュリズムの寓話」論には、謎解きの面白さにとどまらない問題が潜んでいるように思われる。どちらもアメリカ社会とアメリカ人の心を理解する鍵を提示しているように思われるからである。

I 映画版『オズの魔法使い』とアメリカ人

『オズの魔法使い』はいかにもアメリカ人好みの物語である。かつて私は「世紀転換期の歴史と文学——『オズの魔法使い』とポピュリズム」と題するごく短い報告書に次のように書いておいた。「『オズの魔法使い』といえば日本でもよく知られたお伽噺的作品である。1900 年に第一作が著わされて以来多くの熱狂的読者を獲得し、彼らの促しに従って都合 14 作が出版された。ブロードウェイでミュージカル化されたばかりか、作者である فرانク・ボームの死後にも別の作家によってシリーズ本が何作も書き継

Vol. 25, No. 4, 1989.

³⁾ 農民によって作られた「かかし」は、自立していないという意味で農業労働者、森の中で蓄財に励んだ「きこり」は金銭的成功を求めて働き続ける独立自営的農民、と考えることもできる。疎外論的にはその方が良くいようにも思うが、本論考の大筋を左右するほどの解釈替えではないので、このまま議論を進めたい。

⁴⁾ ペンギンブック版に記載された参考文献リストのうち『オズの魔法使い』愛好者たちの定期刊行物 *The Baum Bugle* は残念ながら入手できなかった。

⁵⁾ Gretchen Ritter, “Silver Slippers and a Golden Cap,” *Journal of American Studies*, Vol. 31, No. 2, 1997; Hugh Rockoff, “The ‘Wizard of Oz’ as Monetary Allegory,” *Journal of Political Economy*, Vol. 98, No. 4, 1990; E. W. Hudlin, “The Mythology of Oz: An Interpretation,” *Papers on Language and Literature*,

がれた。1939年にMGMによって映画化された『オズの魔法使い』もまた爆発的人気を呼び、これは今でも上映されることが多い作品となっている。独特の解釈をほどこしたこの作品には原作に忠実であることを重視する向きからは痛烈な批判も出ているようだが、大衆的な人気はその批判を凌駕して衰えない。いずれにしても『オズの魔法使い』はアメリカ人の心の琴線に触れることのもっとも多い作品のひとつであるらしく、最近ではコンピュータ・ゲーム化されたりもしている。自信をもつことの大切さを訴えるそのテーマが、自信をもつ人間でなければ社会的に評価されることのないアメリカ社会で生きる人々に、おどろおどろしくもなく明るいストーリー展開もあって受け入れやすいものだったのである。⁹⁾ このように書きはしたが、この物語が現代アメリカ人の心に占める重みについては、正直なところ測りかねていた。アメリカ人好みの物語のひとつ程度の漠然とした認識しかなかったのである。ところがその認識は、旅客機ハイジャックテロによるニューヨーク世界貿易センタービル崩壊後、アメリカ人とアメリカ社会が世界の人びとからどのような目で見られているかをルポルタージュしたアメリカ人ジャーナリスト、マーク・ハーツガードの好著『だからアメリカ人は嫌われる』に触れた時、霞が晴れるようにはっきりしたものとなった。ハーツガードはアメリカ人の心性をその『オズの魔法使い』好みから例証しようとしてこのように書いていたのである。

「いかにもアメリカらしい物語といえ、少なくとも今の世代にとっては、『オズの魔法使い』をおいてほかにないだろう。これは国民的おとぎ話に最も近い作品だ。アメリカ人のほぼ全員が、四つや五つのころからテレビで『オズ

の魔法使い』を見ている。ためしにイエロー・ブリック・ロード、西の悪い魔女、エメラルドの町、といった言葉を口にしてみたり、挿入歌の『虹の彼方に』や『魔法使いに会いに行こう』をちょっとハミングしてみよう。あらゆる年代、人種、階級のアメリカ人が、すぐに目を輝かせて飛びついてくるはずだ。」「今どきの子どもたちは『オズの魔法使い』をビデオで見る。ということは、見たいときにいつでも、そして多くの場合は、何度でも見ているわけだ。わたしが子どもだった1960年代には、『オズの魔法使い』を見ることがもっと特別な行事で、国民の儀式にさえなっていた。年に一度、ふつうはイースターの前後にネットワーク放送のテレビで放映された。」⁷⁾

ハーツガードが論じている『オズの魔法使い』とは1939年に封切られたMGM映画版であって、原作そのものではない。『オズの魔法使い』は1939年以前にもすでにいくつかアニメ化されその人気の高さをうかがわせていたが、原作を大筋では比較的忠実に脚本化したMGM映画版こそが、ハーツガードの指摘する通り、公開後今日に至るまで原作をも凌ぐ大衆的支持を集め続ける作品となったわけである⁸⁾。主人公ドロシー役を演じて一躍スターの座にのしあがり、あらゆるアメリカ人から愛されるようになった伝説的子役ジュディ・ガーランド人気の高さも映画版への支持を高めた一要因ではあったろう。いずれにせよ映画版『オズの魔法使い』は、それを観ることが「国民の儀式にさえなっていた」と評されるほどの国民的意味を原作に付与した。こうした雰囲気はそれを体感したことのない者には分かり難いことだけに、この一文との出会

⁷⁾ マーク・ハーツガード『だからアメリカは嫌われる』草思社、2002年、155頁。

⁸⁾ ペンギンブックス版『オズの魔法使い』のイントロダクションも同様の指摘をしている。‘Introduction’ by Jack Zipes, in: Baum, *The Wonderful World*, 1998, p. ix.

⁹⁾ 平成10年度静岡県立大学国際関係学部国際言語文化学科英米文化研究室文化系研究報告書、15-16頁。

いは、『オズの魔法使い』の社会的意味を改めてアメリカ史の文脈の中で考え直すきっかけとなった。MGM映画版ひとつをとってみても、『オズの魔法使い』がアメリカ社会にとってもつ社会的意味は、意外なほど大きいものようである。

MGM映画版には原作にはない変更点が幾つかあったが、自分の持てる内側の能力に気づきさえすればすべてが変わってくる、だから自信を持ちなさい、という物語の中心的メッセージに関する限り原作との間にそれほどの違いはない。けれども、映画版が原作以上の影響力を及ぼし得たのは、映像のもつ力と挿入歌の親しみやすいメロディーならびに歌詞の分かりやすいメッセージ性ゆえであった。単純化されたメッセージをロズさみやすいメロディーに乗せたとき、それがもつ力は倍化する。映画版『オズの魔法使い』では、自信をもつことこそ大切だという原作のメッセージに、強い意志の力でみる夢は実現するものだという新たなメッセージが、挿入歌「虹の彼方に」を通してさりげなく加えられていた。その歌詞についてハーツガードはこう言っている。『『オズの魔法使い』が、今も人びとに強い感動を与えるのは、アメリカ人の琴線に触れるからである。すなわち、自分たちはドロシーが歌っているような『思いきって夢みる夢は、本当に実現する』国に暮らしている、という確信が深まるのだ』⁹と。

さてここで映画版『オズの魔法使い』の挿入歌「虹の彼方に」についても若干触れておくべきだろう。というのは、その後のアメリカ映画のなかにもこの曲を用いるものがしばしばあることをどのように理解するかという問題があるからである。たとえば、大規模書店チェーンの若手経営者と、その出店により閉店に追い込まれる零細児童書専門店女性店主との、憎しみか

ら相愛への紆余曲折を描いたお伽噺的ラブロマンス『ユー・ガット・メール』は、互いに想い合うに至った二人がニューヨークの公園で抱き合うエンディング場面でこの曲を流している。あるいはまた、亡くなった妻への想いを断ち切れないと語る子持ちの男性の声をたまたまラジオの人生相談番組で聴いた女性ジャーナリストが、一面識もないその男の愛情深さに惹かれ、婚約者との関係に迷いながらも結局その男性と結ばれる道を選択していくラブロマンス『めぐり逢えたら』も、物語の中ほどでこの曲を流している。いずれも女性監督ノーラ・エフロン作品だが、彼女はアメリカ人ならば知らぬ者のないほどのこの曲を、計算しつくして用いた。この曲が流れたとき、ほとんどのアメリカ人観客は「思いきって夢みる夢は、本当に実現する」という『オズの魔法使い』のメッセージを咄嗟に思い出すだろうと。その意味でこの曲を用いた映画作品は、『オズの魔法使い』の続編的性格を帯びているといつてよい。亡父への思慕から過去の偉大なメジャーリーガーたちを自分の作った球場でプレーさせたいと強く願う男の夢が、数々の障害を乗り越えてついに実現する物語『フィールド・オブ・ドリームス』も同様のメッセージを発信し続けるアメリカ映画のひとつである。一見不可能と思えることでも強く夢みれば実現する、というメッセージほどアメリカ人の心に訴えかけるものはない。この種のメッセージを盛り込もうと腐心するアメリカ映画の製作者たちは、『オズの魔法使い』の別バージョンを連綿と創り続けているともいえよう。

ここでこの映画版における挿入歌の問題も含め、原作と映画版との違いを若干整理しておこう。原作と映画版とのもっとも大きな違いは次の四点に集約される。第一は、すでに論じたように、映画版には原作にない音楽（歌詞とメロディー）が加えられたこと、である。第二は、「ヘンリーおじさんとエムおばさん」（孤児のドロシ

⁹ ハーツガード『嫌われる』157頁。

ーを引き取り育てている）の農場で働く人の善い三人の農業労働者ならびに意地悪な大地主夫人、そしてまたその夫人に愛犬トトを殺されそうになって家出したドロシーが偶然出会う、これまたお人好しの旅回りのインチキ占い師など、原作にはない登場人物を映画版が創作している点。第三は、その資産家夫人をドロシーがオズの国において出会う西の魔女に、三人の農業労働者をそれぞれオズの国で旅仲間となるかかし、ブリキの木こり、ライオンに、またインチキ占い師をオズの魔法使いと設定したこと。第四は、大竜巻に家ごと吹き飛ばされたドロシーがオズの国で経験する冒険物語は、映画版ではすべて竜巻の衝撃で気を失ったドロシーが失神中にみた夢物語だったとされていること¹⁰⁾、以上四点である。原作にはない人物を創作し人物設定に手を加えることで映画版『オズの魔法使い』は、原作ではドロシーがオズの国でのみ出会う登場人物をカンザスでの現実の人間関係が投影された夢として、現実と夢とをダブらせたのであった。結局、オズの国での出来事もすべてが夢ではなく実際に起きたこととして描く原作のお伽噺性は、映画版では薄らぎ、夢物語としてバーチャル化することとなった。後に述べるが、こうした原作の変更は、原作が書かれてからすでに40年も経ていたという事情もあって、原作自体の寓話性——それがあるとすればだが——理解に混乱を生じさせる要因となっている。

ハーツガードは「深読みしたい人には各種の象徴が用意されている」としてこの映画版物語の象徴性について次のように論じた。「ドロシーと仲間たちは、平均的なアメリカ人の複合体のようなものを形成しているのだ。かかしは、1939年当時まだ人口の半分ちかくを占めてい

た農民たちを表わす。そしてブリキ男が象徴するのは労働者——20世紀初頭、国家が製造業へと転換するのにともなって登場した産業労働者だ。臆病なライオンは、もっとも解釈がむずかしい。お国のために軍務に服す兵士たちの象徴だろうか、あるいはたんにこっけいな人を表わしているのか。しかし映画の悪役はすぐわかる。カンザスで人間の姿をとるときは、冷酷な資産家だ。（中略）西の悪い魔女のときは貪欲の権化となり（中略）」と¹¹⁾。原作の寓話性を問題にしたリトルフィールドと実によく似た解釈をしたものだが¹²⁾、ハーツガードの寓話性解釈はドロシーとその仲間たちを「平均的なアメリカ人の複合体のようなもの」としている点でリトルフィールドのそれよりも優れている。登場人物すべてが集合的なものの象徴と考えられているからだ。リトルフィールドの場合、かかしやブリキの木こりが農民や労働者といった集合的存在の象徴と推定されたのに対し、ライオンは金の十字架演説を行ったブライアンという一つの政治家、「オズの魔法使い」も同様にいずれかの大統領という一個人の象徴と推測された。結局登場人物を時に集合的なものとしてまた時に一個人の人間として解釈するリトルフィールドの象徴性理解は論理的一貫性に欠けると言わねばならない。ところが反面、ハーツガードの解釈では、夢の世界（オズの国）のブリキの木こりやライオンが象徴的には産業労働者と兵士たちであるはずなのに、現実の世界（カンザス）ではいずれも農業労働者となってしまう、農民を象徴するかかしを除けば象徴性の混乱が生じている。「オズの魔法使い」にいたっては、それが何を象徴するのか全く触れられてすらいない。その

¹¹⁾ ハーツガード『嫌われる』157頁。

¹²⁾ 1998年のペンギンブック版『オズの魔法使い』には参考文献リストが付けられているから、ハーツガードはリトルフィールド論文の存在をこれで知り、目を通した可能性はある。

意味でハーツガードの象徴性理解も中途半端であった。

さてハーツガードは「ほとんどのアメリカ人が気づいていないのは、この映画が政治の寓話でもある」ことだとも述べている。ここで「政治の寓話」というのは19世紀末ポピュリズムのことではない。挿入歌の歌詞を書いたE・Y・ハーバークと作曲家ハロルド・アーレンがともにフランクリン・デラノ・ローズヴェルト大統領によるニューディール政策を支持する「左翼の活動家」だったということから、大恐慌に苦しむ労働者の救済という政治意識が映画に盛り込まれたというのである。オズの都、緑一色のエメラルドの町に到着したドロシーたち一行が、「ぼくらは正午に起きて、1時まで働きはじめ、昼休みを1時間とったら、2時に仕事はおしまい」と、そこが「労働者の楽園」であることを示す歓迎の歌によって迎えられるのは、作詞家ハーバークによれば、「むろん、エメラルドの町はニューディールだ!」¹³からなのだと。こうしてハーツガードは映画版『オズの魔法使い』に隠された「政治の寓話」がニューディールの政治状況の寓話化だったと断定した。

不況に苦しむ農民や労働者が冷酷な資産家ないし食欲の権化による数々の妨害を受けながらもそれをねのけ労働者の楽園に到達する、そこにニューディールの「政治の寓話」が隠された、という解釈は、一見辻褄が合うようにも思えるが、考えてみればやはりおかしい。この寓話論の象徴性理解を、労働者の楽園で人々を統治している大魔術師にまで進めると、それはニューディールの指導者、フランクリン・デラノ・ローズヴェルト大統領以外に考えられなくなるからだ。しかしそうだとすると、これはほとんどなくおかしい。偉大な魔法使いの正体は、オズの国ではお人好しだが無力なサーカスの芸人、

カンザスではインチキ占い師で、実際には無力なペテン師にすぎないのだから。オズの魔法使いが何の象徴かをハーツガードが問わなかったのも無理はない。ニューディール政策の支援者がその指導者である大統領を無力なペテン師とするわけにはやはりいかないからである。

象徴的意味を深迫いすることが自らの議論を危うくしかねないことにはハーツガードもおそらく気づいていた。彼が象徴性に触れながらも、「たとえ象徴的な意味あいを無視したとしても」として、『オズの魔法使い』のメッセージは明確だ」と物語の主題に話題を転じたのはそのためだろう。「ドロシーと仲間たちは、映画の大半の時間を費やして、魔法使いに期待をかける。ドロシーはカンザスの家に戻るのに彼の助けが必要だと思っているし、かかしは悩みそが欲しいし、ブリキ男は心が、そしてライオンは勇気が欲しい。だが最後にこの四人は、望むものを自分に与えられるのは自分だけだと悟る——実際、彼らはすでにそれらを持っているのに、自身を信じていないから見えていなかっただけなのだ。」¹⁴

すでに述べたように、望むものはすでに持っているのに自信がないためにそのことに気づいていないだけだということ、問題は自分自身の心の内側にこそあるという認識への促しが『オズの魔法使い』という物語（原作）の本来的メッセージであった。ところが「政治の寓話」としての「象徴的な意味あい」がニューディール（左派）的立場からのものだとすれば、それは物語本来のメッセージと食い違う。社会改革に向けて人々の熱情をかきたてるニューディールの政治意識と原作のメッセージとは、思想の深みにおいてそぐわないからである。少なくとも「政治の寓話」的要素を孕む「象徴的な意味あい」は、一人一人の心のありようを問題とする

¹³ ハーツガード『嫌われる』157頁。

¹⁴ 同上、158頁。

この物語の強烈なメッセージの前に色あせている。むしろ、ほとんどのアメリカ人がニューディール左派的「政治の寓話」性に気づかないからこそ、『オズの魔法使い』のメッセージは、ニューディールの限界を超え、いつの時代にあっても、金持ちであるか貧乏人であるかを問わず、広範なアメリカ人大衆の心に訴えるものとなりえたのだろう。虐げられた民衆と暴虐な権力者、そして前者による後者の打破という構図は、圧制に対する純粋無垢な民主主義の勝利を信じようとするアメリカ人好みのお決まりのパターンにすぎず、ニューディール固有のものではない。だからこそドロシーは緑の「楽園」であるはずのエメラルドの都にとどまろうとせず、何もかもが灰色のカンザスに戻りたい一心で、「おうちが一番」と言う。自らの内なる力に目覚めさえすれば灰色の現実も耐えられぬほどの灰色ではなくなるからだ。結局、映画版の「政治の寓話」は極めてラフな構成のものでしかなく、物語自体が放つメッセージはニューディールの「政治の寓話」などをはるかに超える力をもっていた。夢みることの大切ささえ伝えればそれで充分だったのだ。とはいっても、このことは、原作版『オズの魔法使い』に関しても「政治の寓話」的性格が弱々しいということの意味するものではない。「ポピュリズムの寓話」をめぐるリトルフィールドの推理には確かに難点もあったが、原作版『オズの魔法使い』にそれが埋め込まれているという彼の推理自体は誤りではなかったからだ。むしろ『オズの魔法使い』原作版のメッセージは、それが意図的であったか否かは別として、「ポピュリズムの寓話」を埋蔵していたからこそ、より一層時代の要望に応えることができたのだと考えられる。ボーム自身に「ポピュリズムの寓話」を書く明確な意図があったかどうかは分からない。ボームは、昔のお伽噺に盛られた「おそろしい教訓」を強調するための「血も凍るような挿話もさっぱりと取り払った、

より新しい<童話>」を、童話にひたすら娯楽性を求める「今日の子供たちを喜ばせることのみを目標」とした物語を書こうとしたと述べているが¹⁵⁾、ポピュリズムのイメージは物語をデッサンするとき頭に浮かんだ造形上のアナロジーにすぎなかったのかも知れない。しかしいざれにしても、『オズの魔法使い』には結果的に「ポピュリズムの寓話」的性格が備わることとなった。

II 『オズの魔法使い』とポピュリズム

歴史的個体としてのポピュリズムとは 19 世紀末期アメリカで発生した第三政党運動ポピュリスト・パーティー（人民党）による政治運動を意味する。研究史的に見た場合、ポピュリズムへの歴史的評価は一様ではなく、とりわけマッカーシズムの経験に対する反省が高まった 1950 年代中頃には、その民主主義に一点の曇りもないと思われたアメリカ社会にもファシズム化の危険があることをポピュリスト運動の思想的解明から論じたりチャード・ホフシュッターのような、ポピュリズム＝アメリカにおける原ナチ的運動、とする批判的見解も出ていた¹⁶⁾。しかしその後のポピュリズム研究者たちは、ホフシュッターら修正主義派の見解を再びしりぞけ、ポピュリスト運動を現代アメリカ社会の民主主義的性格を築き上げた歴史的里塚として評価しようとする方向に著しく傾斜した¹⁷⁾。そのポピュリズム観は現代政治に関してまで貫かれている。その典型的一例がハリー・C・ボ

¹⁵⁾ ボーム『オズの魔法使い』5-6 頁。

¹⁶⁾ ホフシュッター、斉藤真他訳『アメリカ現代史』みすず書房、1975 年。

¹⁷⁾ 研究史については、岡田泰男「アメリカ中西部の農民運動」『社会経済史学』第 46 巻 5 号、1981 年、拙稿「19 世紀末アメリカ農民運動再考——経済的要因をめぐって一試論」『土地制度史学』第 90 号、1981 年、などを、また参考文献については、Norman Pollack, *The Human Economy: Populism, Capitalism, Democracy*, Rutgers Univ. Press, 1990. 巻末も参照されたい。

イトらの『アメリカン・ポピュリズム』（1986年）であるが、ボイトは邦訳版「日本語版に寄せて」で1992年のクリントン政権誕生をポピュリズムの成果と称揚している¹⁸⁾。日本における消費者運動の指導者の一人である野村かつ子が、かつてラルフ・ネーダーの姉に「アメリカの市民運動を理解しようと思うなら“ポピュリズム”運動の歴史を勉強せねばダメだ」と忠告されたことと述懐しているが¹⁹⁾、アメリカにおけるポピュリズムは、「住民の力を起点に、社会における力の配分を住民寄りに変える運動」²⁰⁾として、社会問題に積極的に取り組む市民の力の発露と考えられているわけである。

ついでに言うておけば、近年我が国のマスコミで用いられる「ポピュリズム」概念のニュアンスは、カリスマ的政治家が民衆に訴えかけ民衆のもつ力と呼び覚まし、その力を自らの政治

活動展開の後背とする、多かれ少なかれ煽情的要素を随伴する政治運動スタイル、といったものとなっており、デマゴークに動かされやすい民衆の軽佻浮薄さや愚かさを暗黙のうちに含意させる用語法が多い。朝日新聞社が発行元である現代用語解説誌『知恵蔵』（2003年版）では項目見出しそのものが「ポピュリズム／大衆迎合主義」となっており、「大衆民主主義が展開する中で、政治家がマスメディアなどを利用しながら、大衆に迎合しつつ大衆を操作して権力を維持する問題が世界的に広がった。（中略）テレビ時代に入ると共に、政治家のイメージを操作したり、ワイドショー向きに政治を単純に劇化したりという方法も生まれた。ポピュリズムは無責任な政治や独裁的な政治へとつながりやすい。しかしまた、ポピュリズムへの批判は、しばしば政治を少数の職業政治家の手に留めたいというエリート的保守主義へとつながっている」²¹⁾と解説している。同様の情報誌『イミダス』はポピュリズムを「ラテンアメリカ」項目の解説のなかでのみ論じているが、「20世紀ラテンアメリカ諸国の都市化を反映して現れた政治動向を示す語」としたうえで、「都市の組織労働者と中間層を支持基盤とする。政治スタイルはカリスマ的個人独裁が主流となり（中略）。政治参加のすそ野を広げた意義は大きい。政治制度の未熟のため経済的利益のばらまきに依拠せざるをえず（中略）」²²⁾というように、これまで民衆の力を土台とした政治運動がファシズム（独裁政治）に落ち込みかねない危うさを「ポピュリズム」という言葉に含意させている。結局、アメリカのポピュリズム研究者には今や例外的ともいえるホフシュタッター的ポピュリズム認識が現代日本のマスコミ的「ポピュリズム」観の主流となっているといつてよい。

¹⁸⁾ ハリー・C・ボイトほか、海外市民活動情報センター訳、野村かつ子・水口哲監訳『アメリカン・ポピュリズム』亜紀書房、1993年。なお1993年公開の邦訳版冒頭には監訳者の一人である水口哲による「アメリカン・ポピュリズムの理解のために」と題する解説が付されているが、19世紀末ポピュリズム運動の紹介部分でいきなり事実誤認がなされている。「1873年の恐慌後、大企業や大銀行の農地買い占めで小作農に転落する者も増えていた。また、大企業化しつつあった鉄道、通信販売商、農具商、仲買商、穀物倉庫業者とは不利な条件で商いをせざるを得ないこともしばしばだった」と。「大企業や大銀行の農地買い占め」とは、1980年代日本における銀行による融資を梃子として大企業に蔓延した土地投機の横行がアメリカの過去に投影され二重写しになったものだろうし、農地買い占めによる小作農への転落増加などという因果関連も歴史学的には辿りがたい。また農民が「不利な条件で商いをせざるを得ない」だった相手として、農民運動と手を携えることで大企業化に成功した「通信販売商」が紛れ込んでいる点も理解に苦しむ。私は必ずしも「通説」に組する者ではないが、「通説」のどこにもこのような歴史叙述は見られないはずだから、訳者の思い込みが筆が滑った結果としか考えられない。歴史学の専門書ではないとはいえ誤った歴史認識が流布するのは残念なことである。

¹⁹⁾ 野村かつ子「クリントン勝利を支えたポピュリズムの思想」『社会運動』No.153、1992年。

²⁰⁾ 野村かつ子「訪米レポート——アメリカ市民運動の背後にあるポピュリズムの思想」『社会運動』No.134、1991年、41頁。

²¹⁾ 『知恵蔵』2003年、朝日新聞社、333-334頁。

²²⁾ 『イミダス2003』別冊、101頁。

「ポピュリズム」という言葉の意味をめぐる以上の認識を踏まえた上で『オズの魔法使い』の寓話性の問題に戻ろう。フランク・ボームが自らの作品に比喩的造形を加える傾向があるのではないかとリトルフィールドが疑ったのは、女性権利運動に関わっていたボームの妻のもとを訪れる女性権利主義者たちを、彼が『オズの魔法使い』シリーズ第二作の登場人物に象徴化して描いていることを知ったためであったという。リトルフィールドはそこで、それならば第一作も同様に寓話的造形がなされているのではないかと考えたのである。そこまではよかった。ところが、である。

リトルフィールドが『オズの魔法使い』＝「ポピュリズムの寓話」論を発表した1964年前後の時期は、実はホフシュッターの見解に対する反批判的歴史研究の数々がポピュリズム研究者によって著わされつつある時期であった。ポピュリストの寛容性が論じられ²³⁾、ポピュリズムは「人間の諸価値の腐食」に対して「人間の尊厳」・「人間的諸権利を求め」、「人間の肯定へ向かって動く」運動であったなどというポピュリズム絶賛の議論がなされたりするほど、ポピュリズムへの評価は大きく変貌していた²⁴⁾。いうまでもなくリトルフィールドもまた、ポピュリズムがアメリカ民主主義発展の一里塚として称賛されるようになった研究史的・時代的雰囲気の中なかにいた。彼がその立場に立って『オズの魔法使い』の政治的寓話性を論じようとしたのも無理はない。しかし結果的にみれば、そうした先入観が彼の推理を誤った方向に導いた。彼の象徴論の構図から判断すると、決定的な岐路は「オズの魔法使い」が何を象徴しているのかの理解にあった。ドロシーたち一行は善なる

ものとしてのポピュリズムを象徴している。それが救いを求めたのは政治であるが、その頂点には大統領が立っている。ところがその大統領に象徴される政治は、善なるポピュリストたちが救いを求めてもまっとうに答えてくれるほど当てになる存在ではなく、逆に合衆国の政治を健全化させる方向で作用した善きものこそポピュリズムである。このような歴史感覚から大統領＝インチキ魔術師という推定がなされたのである。しかしリトルフィールドは「オズ」は南北戦争以降の大統領の誰かだと言うにとどまり、その推理の根拠は何ら示すことなかった。

ところが『オズの魔法使い』の原作には「オズの魔法使い」が誰であるかを示すしるしが実は書き込まれている。「オズ」はオズの国に気球に乗ってやってきたサーカスの芸人で、「オマハ生まれ」ということになっているのだ²⁵⁾。「オマハ」とはドロシーの住むカンザスと隣接するネブラスカ州第一の都市だが、原作にわざわざ「オマハ生まれ」と書かれているにもかかわらず、リトルフィールドは南北戦争以降の大統領で、ネブラスカ州オマハと関係の深い大統領を探索することはしなかった。リトルフィールド以外の論者たちもそれを行ってはいない。そこで、比較的詳細な伝記を載せている人名辞典、*American Biography* および *American National Biography*、によってその点を確認しておこう²⁶⁾。

南北戦争以降1900年までの大統領は8人い

²⁵⁾ ちなみに映画版では「オズの魔法使い」はカンザスから来たと言っているが、彼の乗る気球には“STATE FAIR/OMAHA”と大書されており、原作の「オマハ生まれ」が正確ではないがある程度反映されている。

²⁶⁾ ただしこれらの辞典に記載されない程度の関わりもあるいはあるかも知れないが、それは仮にあったとしても無視して構わないと判断した。象徴というものはそれが何かの象徴であるかぎり多くの人にすぐさま気づかれる程度によく知られたものでなければ意味がないからである。

²³⁾ W.T.K.Nugent, *The Tolerant Populists*, Chicago, 1963.

²⁴⁾ N. Pollack, *The Populist Response to Industrial America*, Mass., 1962, p. 143.

る。リンカーン以後の大統領をその生地と主たる活動地のみに焦点を絞って紹介しておく、こうである。

まずは第17代大統領のアンドルー・ジョンソン。生まれはノース・カロライナだったが活動はテネシー一筋で、グリーンビル市長から州議会議員、連邦下院議員、州知事を経て大統領となった。次いで第18代大統領のユリシーズ・グラントはオハイオ生まれ。ウェストポイント陸軍士官学校卒業後、軍人時代にはミズーリ、ルイジアナ、ミシシッピ、カリフォルニアなどに赴任し、除隊後はミズーリ州セント・ルイス、イリノイと転々とし南北戦争を迎えた。第19代大統領のヘイズは、これもオハイオ生まれ。コネティカットのアカデミーに一時期通ったが、大学はオハイオ。ハーバードロースクールを経て弁護士としてオハイオ州シンシナティへ。連邦下院議員を経てオハイオ州知事となった。次のガーフィールドはこれもまたオハイオ生まれ。オハイオ州上院議員、連邦下院議員を歴任している。第21代大統領のアーサーはバーモント生まれ。やがてニューヨークに移り、弁護士、収税官などを務めた。第22代ならびに第24代大統領のクリーブランドはニュージャージー生まれ。ニューヨーク州バッファロー市長からニューヨーク州知事となった。第23代大統領のベンジャミン・ハリソンはこれもまたオハイオ生まれ。マイアミ大学で学びオハイオ州シンシナティ、インディアナ州インディアナポリスと移動した。第25代大統領のマッキンレーもオハイオ生まれ。弁護士や郡検事を経験した後、連邦下院議員、オハイオ州知事を歴任した。

以上南北戦争以降8人の大統領についてその出生地と主たる活動地を確認してみたが、オマハはおろかネブラスカ州にさえ関わりをもった大統領はなんと一人もいないのである。要するにリトルフィールドは全く根拠のない当て推量を行っていたのだ。そこでわれわれは改めて「オ

ズの魔法使い」が何を象徴するものか問わねばならない。かかしが農民を、ブリキの木こりが労働者をそれぞれ象徴するとすると、ハーツガードの言うように物語の登場人物たちが象徴するのは「平均的なアメリカ人の複合体のようなもの」、何らかの集合性だと考えるのがもっとも理にかなっている。集合的で「オマハ生まれ」に関わるもの、それこそが「オズの魔法使い」に違いない。

ところでネブラスカ州「オマハ」とはポピュリズムの歴史に多少とも詳しい者ならば周知の都市名である。1892年7月4日、不況に苦しむ農民代表から銀貨の自由鑄造論者、社会主義者、単一税論者まで様々な利害と思想を抱く人々が集い、二大政党と「独占」によるアメリカ支配への不満と不信を表明して第三政党運動としての人民党第一回全国大会を開いたのがこの都市で、当時のアメリカ社会に不安を感じていた人々のあらゆる不満に対する処方箋として「万能薬」と評されることとなる総花的政治綱領「オマハ綱領」がここで決議採択されたのだった。要するに人民党と「オマハ綱領」誕生の地がオマハなのである。とすれば、オマハで生まれた「オズの魔法使い」が何を象徴するか、答えは明らかだろう。それはオマハで生まれた人民党そのもの、もしくはその政綱である「オマハ綱領」以外には考えられないのだ。

ところで、「ポピュリズムの寓話」を論じようとしたほどの者ならばこの程度の知識を知らないわけではない。オマハ生まれの「オズの魔法使い」は人民党「オマハ綱領」の象徴なのではないか、とリトルフィールドが考えてみた可能性は高い。しかし彼は「オズ」を大統領とこじつけるために両者の関連性を不問に付し、その他の「ポピュリズムの寓話」論者たちも、あるいは時に疑問を抱きながらも、最初に言い出したリトルフィールドの尻馬に乗る道を選んだものと思われる。そこにはポピュリズムが危険なも

のから素晴らしきものへと 180 度転換した 1960 年代およびそれ以降のポピュリズム観がおそらくは反映していた。善なるポピュリズムがペテン師であるはずがない、それは民主主義の健全化をもたらす誇るべきものなのだから。ところで物語の著者であるボーム自身は、ペテン師だと分かってしまった「オズ」についてこう評している。「本人もいっていたように、オズは、ろくでもない魔法使いではありましたが、やっぱりいい人間だったのです」²⁷⁾と。人々の悩みを何も解決できない無力な存在であっても、オズは心根は善い人間と設定されているのだ。これは一体どういうことなのだろうか。その問題を考えるため、ここでフランク・ボームの経歴を彼自身の西部経験と関連するかぎりで見えておこう。

ボームは 1888 年、ネブラスカ州の更に北に位置するサウスダコタ州のアバディーンに移住してよろず屋を開いた。が、経営の才はなく、折からの農業不況に直面してつづを支払えなくなった農民たちに寛容だったことも災いして経営は失敗、翌年新聞発行に携わり女性選挙権問題などの記事を書いて文筆の才をみせたが、購読者減少には耐えられずこれも 1 年半で失敗、結局 1891 年、新聞記者の職を得てシカゴに戻った。その間、彼は農民連盟を支援したとも言われているが²⁸⁾、彼が中西部農業地帯を去った翌年、人民党とその政治綱領である「オマハ綱領」が誕生したのだった。

サウスダコタでのよろず屋経営と新聞発行者兼記者としての経験はわずか 3 年と短期間ではあったが、ボームは中西部農村社会の現状を体感し、農民運動をはじめとする社会的弱者に対して同情心を抱いたらしい²⁹⁾。かかしやブリキ

の木こりの描き方に表れた恵まれぬ人々への彼の眼差しは、暖かい。しかしそれにもかかわらず、政治的弱者の立場に立ったはずの人民党や「オマハ綱領」に対して彼が懐疑的・批判的な眼差しを向けたのだとしたら、それは何故だったのか。理由はおそらくこうだ。もともと自助的運動として始まった農民連盟などの運動が急速に政治運動化し、それとともに様々な利害や思想を抱く人々、時には既成政党では満たされなかった政治屋までもが入り込み、運動を現実味の欠けた理想と処方箋のごった煮としてしまったと彼は感じたのである³⁰⁾。薬効ばかりを並べ立てても「万能薬」化したことで却って薬から薬効がなくなってしまった「オマハ綱領」など、結局はペテン師のインチキ薬とかわらない、と。

ともあれ、「オズ」が人民党ないし「オマハ綱領」であるという観点から『オズの魔法使い』の寓話性を考え直してみると、この物語の「ポピュリズムの寓話」性はかなり完璧な形をとっていることが読みとれる。結論を言えば、この物語はリトルフィールドが考えたような当時のアメリカ社会全体を象徴化した寓話ではなく、ポピュリズムそれ自体の、ポピュリズム内部の、その意味で正に「ポピュリズムの寓話」だったのである。この点を今少し詳しく論じてみよう。

オズの国には良い魔女と悪い魔女がいたことになっているが、エメラルドの都を中心に前者は北と南に、後者は東と西に配置されていた。東の魔女は「銀の靴」で象徴される魔女で、ドロシーの家がオズの国に落下したとき家の下敷

ディアンや中国人移民労働者にも同情の眼差しを向けていたようである。

³⁰⁾ 人民党に政治活動を見出した政治家に対するこうしたうさんくささの感覚は、ポピュリズム全盛期の青年時代をネブラスカで過ごした中西部文学者ウィラ・キャザーにも見られる。拙稿「文学者ウィラ・キャザーとその時代意識——『おお、開拓者たちよ!』をめぐって』歴史社会学的省察」静岡県立大学英米文化研究室編『変動期の言語文化研究』1992 年、も参照されたい。

²⁷⁾ 邦訳版『オズの魔法使い』206 頁。

²⁸⁾ 'Introduction' by Jack Zipes, in: Baum, *The Wonderful World*, 1998, pp. xi-xii.

²⁹⁾ ボームの書いた新聞記事から判断すると、彼はイン

きになって死んだとされている。更に強い魔力をもつという西の魔女は、ドロシーたち一行を殺すため、「銀の呼子笛」で呼び出したオオカミやカラスや黒バチの群を、あるいは「金色のふちなし帽」を使って「空とぶサル」を差し向け、結局殺すことはできなかったが誘拐には成功した。他方北と南の魔女たちは悪い魔女ほどの魔力をもたないとされている。この魔女たちはそれぞれ一体何を象徴しているのか。リトルフィールドをはじめとする論者たちは、「銀」は銀貨の自由鑄造を、「金色」は金本位的資本家利害を象徴するなど理解したが、果たしてそうだろうか。「銀の靴」が銀貨の自由鑄造というのはまだ良いとしても、「金色」が資本家的利害の象徴だとするならば、それは東部的なものだから、「西の魔女」ではなく「東の魔女」とする方が歴史的事実に符合する。この点について結論をいえばこうだろう。北と南の魔女は南北の農民連盟の象徴であり、東西の魔女たちは金力そのものの象徴だと。東の魔女は銀（の靴）だけだが、西の魔女は銀（の呼子笛）と、それより強力な金（色のふちなし帽）と金銀どちらも用いている。ポピュリズム期の農民運動では、東中西部では運動への支持がきわめて弱かったから、運動内部での金の力もさほど問題にはならない、という意味で東の魔女は死んでいる。ところが西部には銀鉱山地帯があり、ここでは銀貨の自由鑄造を求める運動が活発だった。おそらく運動内部での主導権争いや利害調整をめぐる現金が動くこともままあったに違いない。しかしよこしまな者の手中にある現金は危険きわまりない。それは比喩的に言えば、手先を使って気に食わぬ者を殺したり誘拐したりしようとする。現金という魔力のよこしまな使用は不正や腐敗を生み、運動自体を危うくする危険因子ともなるのである。この点に関して付言しておけば、これまたポピュリストたちが求めたグリーンバック紙幣の増発要求は、それ自体は現金を動か

す魔力を持つものではないから、インフレで潤うオズの居城エメラルドの都としておけば良かった。このように考えてくると、ポピュリズム自体（オズの国）の内部に巣食う危険因子、悪い魔女というのはそういう意味だったと理解されるのである。ちなみに西の魔女はたまたまドロシーにかけられた水により溶けて消えてしまうが、水はおそらく雨を意味している³⁰。中西部における農業不況の原因は干ばつによるところが大きかったから、降雨量が回復すると農民をとりまく状況は好転し、農民運動は下火に向かった。現金（をもつ者）の魔力は降雨量に左右されたというわけである。

「金」といえば、リトルフィールドらは前述したように「黄色いレンガの道」を黄色は金色に通ずると論じていたが、実はこれもおかしい。物語では「黄色」と「金色」とははっきり区別されて用いられているからだ。エメラルドの都に入る鍵は金色だし、エメラルドの都のすべてを緑色に見せた緑色のメガネも、金色のついで頭に固定される。ボームは魔力をもつものはきちんと「金」「金色」と書いているのだ。「黄色いレンガの道」に「金」を象徴させようとするならば、著者はそれを「金色のレンガの道」としたはずで、わざわざ象徴的意味を分かりにくくする理由はなかった。「黄色」はやはり「金色」ではない。「黄色いレンガの道」がオマハ出身のオズの都に通ずる道であったことを想起すると、これはむしろ黄色人種である中国人労働者の酷使によって建設され、ネブラスカ州オマハへと向かった大陸横断鉄道を意味すると考えた方が良いのかも知れない。もっとも物語の単なる造形で、そこに象徴的意味は何もなかったとも考えられる。

では「臆病なライオン」は何を象徴するものだろうか？ハーツガードの言うように確かにこ

³⁰ Hudlin, "The Mythology," p. 460.

これは解釈が難しい。ハーツガードのように「平均的なアメリカ人の複合体のようなもの」だと考えるとブライアンは問題外だが、では何なのか。かかしが農民でブリキの木こりが労働者だとすると、残るは都市のミドルクラス（あるいはその世論）ではないかという思いがしてくる。合衆国政治の中核を担う実力を持ちながら中産階級は臆病で勇気がない。オズの国（ポピュリズム）の旅人たちは、農民は自分には知恵がないと思ひ、労働者は疎外されて心を失ったと思ひ、ミドルクラスは自分が臆病だと悩んでいる。ちなみに、ドロシーは愛犬トトとともに無垢で優しき良き心を意味するだろう。とらわれぬ目でものごとをあるがままに見ることができる。ではこの一行が「オズ」をはじめて見たとき、偉大でおそろしい魔法使い「オズ」はそれぞれにどのように見えたであろうか。ドロシー（無垢な心）には巨大な頭、かかし（農民）には世にも美しい女性、木こり（労働者）にはそれ以上気味悪い怪物は想像もつかないほど恐ろしい獣、ライオン（都市中産階級）にはじっと見られぬほどキラキラ光る火の玉であった。これは人民党＝「オマハ綱領」が無垢な心には頭でっかちに、農民には優しい存在に、労働者には恐怖を抱かせるほどグロテスクなものに、都市中産階級には見つめることもできないほど熱く触れることすら憚れるものに見えた、と解釈できそうなのだ。同じものでも立場が異なると違ったものに見える（オズは立場の違うものには違った姿を見せる）、ということだが、ここに至る推定作業は逆で、人民党「オマハ綱領」が美女や火の玉に見えてしまう集合的存在は何か、と考えるのである。ポピュリズムはもともと農民的运动であったから労働者の参加は限定的で、都市中産階級の参加は更に少なかった。「オズ」が気球に乗って「オズの国」を去ったあと、この国の統治を任されるのがかかしとなる理由はポピュリズム自体がもともと農民的な運動だ

とボームが認識していたからであろう。「オズの国」の統治はペテン師から本来中心となるべき農民に譲り渡すのがよい³²⁾。こうしてそれぞれの集合的存在とポピュリズムとの距離感をボームは「オズ」の見え方に反映させたように思われる。

『オズの魔法使い』を寓話的作品として解析する作業はのめり込むとなかなか面白い。原作の挿し絵も無意味ではなさそうだが³³⁾。例えば西の魔女に奴隷化されていた弱虫一族のウィンキーは、挿し絵ではつるつる頭に僅かの毛があるだけの姿で描かれているが、似ているとは必ずしも言えないものの、どこか弁髪中国人移民労働者を彷彿とさせる。しかしこれ以上推論を進めることはこの作品の文学的理解としては意味があっても、思想的には無意味だろう。むしろ問題は、ポピュリズムに共感を寄せながらその時代を経験したボームによるこのような寓話的物語が、なぜ書かれ、またなぜ20世紀初頭のアメリカ人に受けたのか、という点にこそあるからである。

すでに指摘したように、ボームは子どもたちに喜ばれる純粋に娯楽的作品を書いたこととわっていたが、それでもやはり彼には寓話を書く意図があったのではないかとと思われる。悪い魔女は水をかけられて消え去り、そのことをきっかけにして偉大な魔法使いがペテン師であることが判明してオズの国は平安を取り戻した。干ばつを主たる原因として生じた苦境を克服する道の模索に、あれやこれやの輩（悪い魔女）が寄ってきては打開策をごちゃごちゃにし

³²⁾ 注3)で述べたように、かかしが農業労働者だとするならば、エメラルドの都の統治をかかしに任せたこのプロットにはボームの抱いた理想が投影されているのかもしれない。ボームはなんらかの社会主義的思想を抱いていたともいわれているが、この点について今のところよくは分からない。

³³⁾ 挿絵については、邦訳版では偕成社文庫版が原作に忠実でもっとも良い。

てしまった（オマハ綱領）が、結局は降雨量の回復（悪い魔女の死）で事態は元に戻った、しかしその間、一般庶民は誰もが自分を見失って右往左往していた、だから彼らが自らの持てる力に気づきさえすればあんなことにはならずすんだだろう、との思いがボームにはあったのだと思われる。その意味でボームの「ポピュリズムの寓話」からは、ポピュリズムの善意を認めながらも、ホフシュッター的眼差しでそれを眺めるボームの、一步距離をおいた批判意識が感じられるのである。ボームのポピュリズム観は平板ではなく陰影に富んでいると考えるべきだろう。とはいっても、ボームの真の意図は、再三述べたように、足りないのは自信だけだから、自信さえ回復すればすべてが好転するはずだというメッセージの発信にこそあった。

Ⅲ 結語——セルフ・ヘルプへの道

人が人生で出合うさまざまな問題は常にその人の主観で捉えられるものだ。しかしその解決を自己の外側に求めるか自己の内側に求めるかで、問題の意味は大きく異なってくる。解決すべき問題が社会に厳然と存在している事実が変わりではなくとも、その解決策を外側に求めればそれは社会問題となり、内側に求めれば個人の心理的問題となる。「ポピュリズムの寓話」でボームが示したのは後者の道をとろうというメッセージであった。その意味でポピュリズムの経験を「ポピュリズムの寓話」へと進めたボームの社会意識は、問題の捉え方を社会問題から心理的問題へと転回させていた。このような心理主義への促しはしかし、アメリカ社会にあって珍しいものではない。むしろ、社会的問題を個人の心の問題に解消してしまおうとする態度は、「自助（セルフ・ヘルプ）」の推奨賛美として、実はアメリカ社会とその歴史に一貫して流れ続けてきた大河にほからなかった。いうまでもなくその源流はベンジャミン・フランクリンにあ

る。

アメリカ人の原型とみなされるフランクリンを嚆矢とし、以後今日に至るまで発刊され続けてきた「自助本」の数々は、今では一冊で数百万部、数千万部もの売れ行きを誇るベストセラーを生み出すほどになっており、いずれも「成功」は心がけ次第と論じてきた。いわゆる「プラス思考」の勧めである。しかしこの健康で明るい思考法の勧めは、逆に言えば「失敗」も心がけ次第、ということを含意しており、従って社会が悪い、と言うのは「マイナス思考」に発する愚痴、自己の責任を転嫁する情けない発言と見なされることになる。そんな心持ちだから「失敗」するのだと。

「富に至る道」（1757年）のなかでフランクリンは「こんなに重税をかけられたんじゃ、国じゅうが破産しちゃうんじゃないですかね?」と嘆く声に対し、フランクリン自身の化身であるエイブラハム長老の口を借りてこう論じている。

「税金は、たしかに、きわめて重い。」しかし「政府より課せられる税金だけがわたしたちの支払わねばならぬ唯一のものであるとしたならば、われわれは、もっと容易にその重荷から逃れることもできるはず」なのに、「わたしたちには、このほかに多くの税金がかかっており、それが、わたしたちのうちのある者にとっては、税金よりもずっと重いものとなる」と。税金以外の「税金」、それは「税務官のほうでも、減額承認による負担の軽減もしくは免除などの処置をとろうにもとりえぬ性質のもの」で、「怠惰によって二倍の、慢心によって三倍の、愚行によって四倍」となる「税金」なのだ。だから「1733年の暦の中で、貧しきリチャードが言っているように、天はみずから助くるものを助くであります」（引用文中の傍点はフランクリン）という結論が導かれ、このような「よい助言」は「それに従えば、何かの役には立つてまいしょう」という

ことになるのである³⁴⁾。

自助努力ですべてが解決できると主張したかにも見えるこの1757年のフランクリンと、イギリス本国から課せられた「重税」に対する植民地側の反抗に始まる独立宣言の発布とそれに続く独立戦争遂行に際して指導者の一人となった19年後のフランクリンとを較べてみれば、心理主義的自助努力ですべてが解決できるものでは必ずしもない、ということフランクリン自身が弁えていたことは一目瞭然だろう。暴政に対する抵抗は市民としての義務だと高らかに謳う独立宣言文の起草にすらフランクリンは関わっていた。どんなに自助努力をしたところで解決しきれない社会問題に対しては社会変革(レボリューション)も必要である。そのような時に「よい助言」を馬鹿の一つ覚えのように繰り返していても「何かの役には立つ」ものでもない、ということフランクリン自身は独立戦争の際に革命側に立つことで身をもって示した。どんな「重税」が課されようと、どんな逆境に直面しようと「心がけ」でそれを乗り切っていく者はいつの時代にもいる。しかし乗り切れない者は乗り切れる者に増して多く、それは個人の「心がけ」だけではない、正に社会に起因する問題であった。社会問題は社会問題として厳然と存在し、個人の心のありようで解決し切れるものでは決してないのである。だから自助を唱えるフランクリンと、革命側指導者として独立運動に寄与したフランクリンとの間に見られる言行不一致は、その不一致から後世の人間が学ぶべきものがあることを暗示したはずだった。変革に立ち上がる時を見極める眼、判断力の重要性である。ところがフランクリンのこの言行不一致は問題として問われることもなく、分断された二人のフランクリンがそれぞれ偶像化さ

れていくこととなった。心理主義的自助を唱えるフランクリンは、後のアメリカ人の生活哲学の土台をなす原思想としてアメリカ人の心の中に生き続ける一方、独立戦争に身を挺したフランクリンは、合衆国建国の偉人の一人として額縁のなかにおさめられたのである。独立運動への参加ばかりではない、消防隊の結成など制度を創る社会的営みの数々もまた自助(セルフ・ヘルプ)のうちであることをフランクリン自身は身をもって示していたにもかかわらず、既存の制度のなかで、与えられた制度を所与の前提として自分が「よい心がけ」をもつことだけがフランクリンの言う自助(セルフ・ヘルプ)であるかのように受け取られていくこととなった。このように考えてくると、「ポピュリズムの寓話」を書いたボームが前者のフランクリンに連なり、ポピュリズム自体は後者のフランクリンの流れを汲むことが理解されよう。しかしアメリカ人は圧倒的に前者のフランクリンに惹かれる。そして後者が額縁の中から飛び出してくることは、比較的少ない。

『オズの魔法使い』は『フランクリン自伝』の延長線上にある作品である。むろん違いはある。フランクリンは厳しい自己審査(日々の反省)による生活態度の絶えざる再構築を「自助」の要件として掲げたが、ボームは自己の内に潜在する能力に気づくことで「自助」への道が開かれると唱えた。それが映画版『オズの魔法使い』ともなると大きな夢をみることで「自助」はかなうものだということになった。いずれの場合もそれなりに努力は必要だが、それにしても同じく「自助」といっても、どこか次第に安逸な方向に流れてきている感がする。結局『オズの魔法使い』は、アメリカ人が社会問題を解決しようと努力することにいささか徒労感を抱き始めた20世紀初頭に、問題の解決策はそれぞれの心のなかにあるだけだと語りかけ、結果として社会意識を縮小させる作用を及ぼした物語

³⁴⁾ ベンジャミン・フランクリン、斎藤正二訳「富に至る道」『フランクリン自伝』講談社文庫、327頁。

だったように思われるのである。とにかく自分のことを考えろと訴えるこの毒気のない心理主義的「自助」物語に、読者たちは、あるいはこの物語を子どもに与える親たちは、どこかほっとするものを感じたのであろう。19世紀後半の激烈な競争がもたらした資本主義の荒涼とした修羅場に直面しながらも、灰色のカンザスから緑のエメラルドの都へと赴き、そして自己の内なる力に目覚めて再び灰色のカンザスへ戻ってきたドロシーの物語は、激烈さを増す資本主義社会の修羅場の中でも、自信をもちさえすれば生きていけるとの安心感を与えるものだったにちがいない。けれどもそれはやがて毒気のない

バーチャル空間への逃避に道を開く鍵でもあった。お伽話から毒気をなくそうとしたボームの試みは、やがて毒気のない物語と娯楽施設とを創り出したディズニーへと引き継がれ、夢のバーチャル空間のなかで夢だけをみて一時の解放感を得ようとする「消費的」感性を育むことになる。生活の現実からはるかに遊離した欲望すら、バーチャル化した「消費」は満たすことができる。ここではこれ以上論じられないが、『オズの魔法使い』はその意味で、ウィリアム・リーチが指摘するように、20世紀アメリカにおける大衆消費社会幕開け期に相応しい物語でもあった、といえよう³⁵⁾。

³⁵⁾ William Leach, *Land of Desire: Merchants, Power, and the Rise of New American Culture*, New York, 1994, pp. 250-251.